続 文化は、今に生きる

畦の草たち

深澤芳樹

お百姓さんの宇根豊さんに、「畦を見れば、お百姓さんがわかる」と、聞いたことがある。

そこで、宇根さん(『生きもの語り』家の光協会)に、畦を案内してもらおう。

畦は、水田のきわ、踏み固められた中央と、その間からなる。お百姓さんが田まわりすると、土を踏み固める。歩くのは、畦が崩れないように畦の真ん中。ここは、硬くしまった土になる。こうして、土質が、田んぼ側から順に、湿った土、乾いた土、乾いた硬い土になる。

水気の多い土を好む草、乾いた土がいい草、乾いた硬い土でもたくましく生きぬく草が生える。

田んぼ側から、畦蓆、高三郎、いぼ草、雀稗、蚊帳吊草、日照子。つぎに、茅、菫、たんぽぽ、あざみ、苧麻、きらん草、そして、大葉子、力芝、雄日芝。

田んぼのきわに生えるのは、

畦蓆、別名溝隠。ききょう科。湿気をこのむ多年草。茎は二〇cmくらいで地面をはう。夏から秋に紅紫色の斑点があるきれいな花がさく。咲き終わると、花柄が下にたれる。

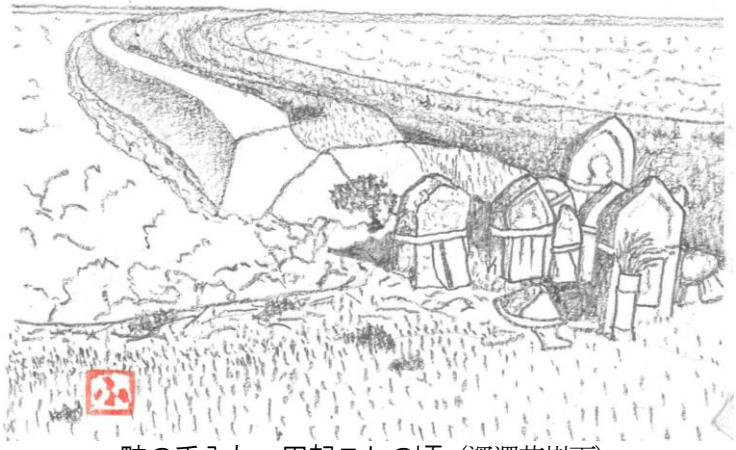
高三郎。きく科の一年草。茎は、直立か斜上し、高さ一〇～六〇cm。径一cm内外の目立たない花を、夏から初秋につける。

いぼ草。つゆくさ科の一年草。夏から秋に、三弁の白い花が咲く。いぼにつけると取れるので、この名がある。若芽は、食用。

雀稗。いね科の多年草。束生で、高さ五〇cmくらいになる。夏から秋にかけて、二列の小穂が、五～一〇cmの枝穂にならぶ。

蚊帳吊草。かやつりぐさ科の一年草。まばらに束生しひげ根をだし、香気がある。名は、茎をさいて四角にする子どもの遊びを、蚊帳を作るのに模していう。

日照子。かやつりぐさ科の一年草。束生で、二五～四〇cmくらいになる。日当たりのよい湿地をこのむ。花は夏から秋、茎頂に再三分岐して、径二mmくらいの小穂をつける。夏の日照りに負けず、繁茂する。



畦の手入れ、田起こしの頃（深澤芳樹画）

田んぼから少しはなれて生えるのは、

茅。イネ科の多年草。ススキ。神楽では鳴物用の木、スズの木に。

菫。すみれ科、無茎性の多年草。ワラビ、ニンジン、モヤシ、イカの油炒めに、菫の花をくわえて色取りを楽しむ。

たんぽぽ。きく科の多年草。葉は食用、根は健胃剤になる。

あざみ。きく科の多年草。山原野に多い。早春の若芽は食用になり、根は「山牛蒡」の名で、醤油漬けのお土産がある。

苧麻。いらくさ科の多年草。カラムシ。葉は、裏白。茎に硬い靭皮繊維があり、着物や紐に利用してきた。

きらん草。しそ科の多年草。地面をはい、春の彼岸の頃に紫色の花が咲く。で、ジゴクノカマノフタともいう。干したものを煎じて、熱さまし、高血圧の薬にする。

田んぼから一番遠い、畦の真ん中の通り道に生えるのは、

大葉子。おおばこ科の多年草。春から秋に、一〇～二〇cmの花茎をのばし、白花を密につける。新芽、ロゼットなど葉は食用に、種子は薬草名車前子。子どもの頃、花茎を絡ませては勝負した。

力芝。いね科の多年草。日当たりのよい草地に生える。非常に強いひげ根を地中に下ろし、抜くのがむずかしい。名は、これに由来する。花は、夏から秋。

雄日芝。いね科の一年草。ひげ根をだし、束生して、高さ三〇～五〇cmになる。シコクビエは、本種を栽培化したもの。

「お百姓さんは、足で育てる」何回も何回も田んぼに足をはこんで考えためす、田まわりだ。その回数が多いお百姓さんほど、通り道がしまって、両側が田んぼなら生えた草に五列の帯が見えてくる。さらに靴底についた種子が通り道に残る。そして今度はその草たちが、しっかりと根をはって、畦を守る。

（日本考古学）